



Title	樓居賦
Author(s)	中井, 天生
Citation	懷徳. 1940, 18, p. 49-51
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89046
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

などの「よりは」「ゆは」といふ云ひ方があるにかかはらず、一方に「すは」といふ云ひ方があり、しかもその方が多く用ゐられてゐるといふ事は注意してよい事ではなからうか。即ち「よりは」といふ言葉は「水は空氣よりは重い」といふ風に「比較」を示す概念的な記述に用ゐられやすい言葉であるに對して、「すは」の方は、その上に述べられた事實を否定して、別の事實を望まうとする「事實」の上に立つた云ひ方でそこに實感があり、その下に詠嘆的な「は」の助詞がかへられてそこに餘情がこもり、かうして「すは」といふ表現が萬葉人に愛用せられたと見られないであらうか。

即ち「なくに」の「に」、「すは」の「は」、ただ一語のせんくに終結したやうであるがかう見る事によつて、こゝにも萬葉の作品のもつ「餘情」の世界を明かにする事が出来るのではなからうか。

(昭和十五年八月九日稿了)

詞藻

樓居賦并序
黃裳 中井 天生

昭和己卯之春。寄進懷德堂水哉館遺書於浪華重建書堂。歸而廬于左京大堰坊。聽事勝水哉館粉隸。樓上有華胥國門橫扁。壁間揭華胥國天樂樓兩面二記。四方展開。隣樹修櫟。東北望比叡山如意嶽。

時窓淨几。讀書彈琴。作樓居之賦。其辭曰。

聚經藝之偉迹。展祖考之遺封。哀手澤之難銷。傾眷眷之微衷。遷篋奉學廟。慕舊追筆蹤。誰尋石室之圖錄。啓前哲之金籙。解永年之心緒。安歷世之家寶。託躬洛師。卜居奧區。余有足疾。缺濟勝具。

置杖不出門。天憐授小樓。東環綿延之群嶺。望台嶽東北之陬。仰翠嵐之遶峯。看白雲之抱岫。彼有宮禁之鬱。帶鴨河之杳渺。吾居斯樓。心關邀曉。一枝幽樓。以比鶴鷄。隱几焚香。放目蒼昊。西則餞納

日。南則夜月皎。北牖三開。清風颼颼。邀氣而吐納。漾漾如乘舟。入華胥之門。斂倦怠之眸。起來繙書。橫琴彈奏。緣文辭弄聲調。逾漢唐遡殷周。順抑揚尋幽韻。以摛聲文之秀。在今嗜古。喜餘音之嫋

嫋。吾從我所好。不厭人之笑吾愚。進就南窗。且夕攸息。黑地白文。妙辭掩壁。華胥有記。表錄天樂。

圓椅龍手。驪珠在握。大德是倚。前王是服。

圓椅隱元禪師舊物、履軒自稱華胥國王、故曰前王、履軒幽人遺愛、

君拾先著。爰啓寫局。收整殘

圍。次第輯錄。筆痕千卷。聊完孫職。如意如屏。露其半體。比叡雙鬢。高舉綠髻。比隣樓屋。連接苑

稿。

圍古韵入支

樹頭參差。疊葉蒨蒨。濃淡交影。層綴繡繡。近則常綠白英之木蓮。尖葉蒼膚之梧。細葉素

華之槿。長幹褐毛之櫚。朝開夕謝。歎芬榮之易過。巨手岐裂。譬羽扇之蕭疏。碧葉紅瓣。如春桃之著

花。素葩團團。如藤穗之在架。氣盈執簡。倦則移座。悠悠消日。我心以寫。我本愛峨。無迴西遊之車。

暗水導我。我在洛之左。地無水泉。稱曰大堰之里。身在都邑。神在嵐水之涘也。歌曰。大堰之水。引

我入洛。維嵐之峽。近哉脈脈。大堰之涘。昔我所息。是斯舊居。移來在洛。大堰之水。泛泛滑滑。載

夢往還。樂哉吾廬。

鈴木無隱翁傳

大江萬里

余嘗寓勢州。聞鈴木無隱翁之名。爲人恬澹自樂。蓋昭代之逸民也。一水迢遙。空

瞻山人云二句綱領

欲往從之。

有詩人兼葭之思焉。無幾余赴野州。又轉入京都。杳々十年。不復知翁爲何狀也。己酉之秋。偶有人告

曰。翁亦來住都下。余聞而驚且喜。卽往訪其居。時翁方臥病。聞余名擁被出迎。狀貌魁梧。髭鬚皓々

然。余仰視未發一語。翁徐把余手。引而上堂。欣然曰。嘗在勢州聞子名矣。新知猶舊知也。乃拂席而

坐。突如謂曰。天理流行。心性惺々。是道之本源。又曰王學要旨近時學問走細瑣爭毫末。人心益陋。世道益

衰。是可歎已。余聽而大悅。且悔相見之晚也。翁在市廛雜沓之中。蓬蓽環堵。僅庇風雨。實無長物。

壁間琴一張。案上書數卷。優游起臥。怡然自樂。又曰自樂之狀聞搢紳諸公嘗相謀。欲卜寬閑之地。構一室以

爲其隱棲之處。告意於翁。翁亦不拒焉。一夕忽大聲呼曰。飛樓亭然。有花有月。無是雲龍山人故鶴亭

耶。又曰自樂之言家人驚竊窺之。翁坐陋室。仰觀俯笑。意如其樂者。蓋翁常能想像未來事物。亡而爲有。虛

而爲盈。是以樂亦在其中矣。又曰自樂之理一日病俄篤。謂人曰。燈將滅焉。油先絕矣。儼然而逝。年六十七。

實明治四十三年三月六日也。

翁名□□。稱三郎。鈴木氏。無隱其號。米澤人。父辭齋業蘭醫。翁少時遊江戶。就古賀茶溪修漢學